

# 大陸（満州）

## ドンゴロスの兵隊（三）

岡山県 田上 建

### 抑留市民の解放

昭和二十一年（一九四六）年十二月三十日、私達の病第十一大隊の市民は、全員営庭に集合の伝達があった。寒い営庭に長い間並びましたが、夕暮れ近くなって全員が大隊へ戻された。翌三十一日再び集合し、間もなくソ連兵に連れられてトボトボと門を出て行く姿を見た。

近年岡山の憲友会会長より聞いたところによると、再三解放運動されたそうだが、同氏自身は二

度目の開放の昭和二十一年二月、第六四六收容所を出て、家族の待つ北鮮の平壤（ピョンヤン）へやっと辿り着いたが、子供も妻も既に亡くなっていたと言う。

その大晦日に出て行った人の中には、小説家の新田次郎氏も居たらしく、著書『望郷』の中で「突然解放されたその夜の寒さと、深い煙霧の中を彷徨い続けた絶望感は、忘れることはできない」と書いておられる。また、武安素彦氏の『幻の間島省』という本の中でも、突然約一千人の戦犯容疑者が食料も持たず夏服のまま釈放されたという。その中の五十人は再び收容所に戻り、他は間島市内に流れ込んだが、受入れ余力も無い居留民会は北鮮向け六百五十人、長春向け二百五十人にコーリャン五合のみ与えて出発させ、百人は市

内縁故者の家に分宿したと言う。

「厳寒の中を出て行く人も見送る人も、涙の別れだった」と書かれておられる。私達も防寒着もなく、体力の弱った人達が、この寒さを凌いで目的地へ無事到着できるだろうかと心配していたが、その翌日から二人、三人と収容所へ戻って来た。

話によると、引率のソ連兵はいつの間にか居なくなり、皆思い余って散ってしまったのだと言う。戻って来た人達は寒さを凌ぐため倉庫の中で焚火をしていたが、私達が列車炊事で目を痛めたように、その人達も煙で目が見えぬようになったらしく、共に労りながら肩を組んでトボトボと門から入って来る姿があった。

## 入 院

我々の大隊では、全員が市民として解放され、少数の病人と本部要員のみとなって、元旦を迎えていたが、部屋の外から「死んでいるぞ！」と言う声が聞こえた。昨日までは私達に関係なく埋葬

していたが、みんな解放されてしまっただけに「これは大変だ」と飛び出した。

昨日まで大勢居た建物のガランとした中に十人程の集まりが三個所あり、そこに三人の遺体があった。昨日まで大勢の体温で維持された室内の温度が、昨夜は解放のために極度に低下したのではないか？ 毛布も持たない人も居ただけに、病人には堪えられなかったものと思われる。遺体は私の手で、兵舎近くに用意された穴に埋葬した。翌二日にも二体、再び埋葬作業をしていると、私は急に悪寒が走った。これは大変だと心配した通り、その夕方から高熱が出た。

翌一月三日、皆の言葉に従って平壤の病院へ入院した。病室に入ると患者がちょうど魚市場のト口箱に並べた魚のようにビッシリ寝かされており、私もその中ほどに寝かされた。病室の隅二個所にペーチカがあったが石炭不足のためか部屋の温度は外気と余り変わらないように思われた。

患者は全員が発疹チフスで高熱が続いているら

しいが、室内は静かであった。寝具は全員毛布一枚が支給されていたが、私は列車炊事で貰ったドンゴロス三枚を毛布の下に敷き、大切に持っていた米を枕にして寝ていた。ヒヤッとすることこの枕が発疹チフスの高熱を下げるのに役立つてくれたものと嬉しく思っていた。

元気になった頃、衛生兵に見付かり「個人が米を持つてゐることは違反だ」と没収されてしまった。後で看護婦さんに聞いたら、炊いた米は臭くて食べられなかつたらしい。私の高熱と汗で黄色に変色してゐたのだからと、共に笑つてしまつた。

入院中、朝になるとゴツンゴツンと音がする。何の音かと思つてゐたが、夜の内に死亡した患者を、足を持つて引きずり降ろすため、頭が床に打ち付ける音であることを知つた。それから、毎朝その悲しい音を聞きながら、自分の無事を喜び、明日は我が身と覚悟を決め、また無事を祈る毎日であつた。

入院はしていても、薬はソ連軍に没収され一粒の薬も無く、軍医はただ「気力で病氣と闘うよ」と病人を鼓舞してゐた。私が快方に向かつた頃、第六四六收容所では一日平均六十三人の死亡者があり、一番多くは九十三人であつたと聞く。

そして、どんな大きな作戦でも六十三人の戦死者は出ないと教えられ、大変な数だと話し合つたものである。死亡すると、残された人のために衣類は全部脱がされ、真つ裸の足の親指に、官姓名を書いた荷札を付けられて死霊へ、そして雪の中を埋葬のため運ばれていった。

そんな病室の中で、十七、八歳の若い看護婦さん達の働く姿が、患者にとり、どれほど励まし勇氣付けられたか判らない。その中でも新潟生まれの小柄で色白い、丸々とした佐藤看護婦さんには私は大変お世話になつた。朝夕二度の食事は飯盒の掛け盒半分のお粥と梅干一つであつた。朦朧とする熱に侵されながら「これを食べなければ死んでしまふんだ」と繰り返し、繰り返し思い続けて

いた。しかし、梅干一つではなかなか食べられず、二つ貰って、やっと全部食べることができた。

また、熱のために口の中が渴き、冷たい氷や水が欲しくてたまらず、無理を言ったものである。そのため当直が佐藤看護婦さんであると安心し、見えぬと悲しむ毎日だった。私にとっては母のような存在であった。

この闘病中、不思議に思ったことは、朝、目が覚めると左隣が、そして右隣が、または両隣が亡くなることがあったのに、私は全く気付かなかつた事である。二十歳過ぎの若者でも、栄養失調になれば、こんなにも苦しみもなく静かに死んで行けるものなのかと悲しく思った。そして、隣の冷たい頬や手に触れながら、明日の我が身の不安と、現在生きている事の喜びを感じる朝であった。

少し熱が下がった頃、初めて二重になったガラス窓に、美しい氷の花が咲いていることに気が付

いた。それから、看護婦さんが作ってくれていた氷も、二重ガラスの中でできたということも知った。手を当てても熱くない程のペーチカではあったが、元気になった患者達が集まり、そこは雑談の場となっていた。水筒をペーチカの中で次々と暖めて湯たんぽを作ったりしていた。患者は湯たんぽの水を飲むことは禁止されているにもかかわらず、喉の渴きに堪えられず飲んでしまったり、中には水筒の中に小便を入れる人もいた。

後に飲む事を禁止されていた理由が、死亡者の衣類を洗濯した水が氷り、それを溶かした水を使っていたからだとなり、愕然としたことを思い出す。

### 退院、収容所の冬

元気になって退院を命ぜられた私は、病院を後に、他の二人と一緒に兵舎に帰った。暖かい瀬戸内海の海岸に育った私には、衣類を持たない満州の冬を大変心配していた。ところが、二月初旬までの病院生活、退院後間もなく、高畑中尉が発疹

チフスで入院し、免疫がある私が看護につくことになった。

延吉の雪はサラサラしていて、夜積もって、朝風が吹くと雲は飛んで地面が見えてくる。以前から逃亡を警戒してか、ソ連軍の通達は「宿舎から十メートル以上離れると撃つ」と言う。そのため、別棟の便所へ行くことを恐れた人達は、出入口へ放尿している。次第に後ずさりして最後は入口から放尿するため便所の中はスケート場となる。

収容所は一千人単位で次々とシベリアへ向けて出て行き、所内はいつの間にか淋しくなつてゆく中で、相も変わらず作業は薪取り、埋葬用の穴掘り、糧秣受領、死体埋葬、ソ連軍の使役などが続いていた。しかし、当時の遺体はソ連と日本軍医の共同解剖のため、胸から腹部にかけてセメント袋の糸で切開部を閉じていた。少し離れて見るとちょうど鎖のよう見え、血の一筋二筋の流れている遺体を乗せた列車が、吹雪の中をトボトボと

消えて行くのを見てみると、防寒着も無く寒そうに運ぶ人も、運ばれる鎖の入った真裸の人も哀れであった。

前に書いたように、私は発疹チフス入院の高畑中尉の付添いを命じられた。早速病院に行く中尉は高熱のため意識は朦朧として脳症を起こしていた。しかし、中尉も良くなり、夜の付添いから解放された。

朝二人連れの看護婦さんに会う。一人は看護婦の佐藤さんと判りお礼を述べたが、すぐに私が判らなかつた。しばらくして、二人は同時に「ドンゴスの兵隊さんだ」と笑い出した。若い二人だけに笑いが止まらず、私も一緒に笑ってしまった。炊事列車で貰った三枚のドンゴスを寝具にしていた私は、病院内で話題になつていたらしい。

昭和二十一年八月末に私達は帰国のため延吉を出発したが、軍医、看護婦、衛生兵、特殊技術者は残されたことを思い、また八路军と共に長い

間、中国の各地を転戦したのではなかったか、また、看護婦の佐藤さん達は元気に無事新潟へ帰って来られただろうか、時に思い出す。

高畑中尉が退院してホツとしている頃、夜寝る時に、上を向いて寝られなくなった。親しかった軍医に相談すると、早速検査をしてくれ、その結果肺に水が溜っているということであった。大きな注射器を持ってきて、すぐに胸水を抜いてくれたが、薬も無く食料も無い中で、今後この病気とどのように闘えばよいのだろうか、心配で眠ることもできなかった。

軍医と原因について色々と話したが、北青の留置場の中で、北鮮の保安隊に角棒で背中を殴られたのも一因ではないかと思われた。有難いことに、その後一滴の薬も飲まず、一日も寝ることもなくそのまま全快してしまった。

復員後も、レントゲンを撮るときにはそのことをいつも伝えていたが、医師からの指摘はなかった。しかし、平成二（一九九〇）年の暮になって

「古い傷がある」と川崎医大で初めて言われた。多分、レントゲンの性能が良くなったのである。う。

ある日、軍医からの要請で結核病棟へ勤務することになる。自分の病気のこともあり、一応断つたが、軍医は結核菌の出ぬ患者ばかりだと安心させ、私も何かと都合の良いことも有るかも知れないと勤務することにした。

軍医と共に病室を回っていると、私と同様に胸に水が溜り、呼吸困難な患者も多くいた。自分の体験から、早く抜けば楽になると思つて尋ねると、この人達は壊血病のため血管が破れて胸水の中に血が入り、胸水を抜けば死亡するのだと教えられた。

#### 死体埋葬

昭和二十一年三月から四月の初めにかけての四日間、収容所の中に埋葬している遺体の一部である三千体を掘り出して、丘の上に掘った大きな壕に五百人ずつ埋葬する作業があった。極寒の間

は、余りにも多い死亡者に充分な埋葬ができなかったため、雪が失くなると、露出している遺体もあつたようで、完全に埋葬するために、ソ連軍の協力で丘の上に壕が掘られたと聞いた。

私も一度埋葬用穴掘りの使役で、凍土はつるはしを寄せ付けず、焚火をして暖めては掘って行くという体験をしたことがあつたが、完全な埋葬ができなかつたのであろう。各大隊から出てきた兵隊が営庭に集合すると、営舎司令官は我々の戦友を大切に扱って貰いたいと話しながら、遺体を一人を抱いて輜重車に静かに乗せていた。

元氣そうな営舎司令官と違つて、私達は栄養失調の体ではそんな元氣もなく、掘り出された真裸の凍つた遺体の、首の下と膝の下へ網を入れて、四人掛りで輜重車に三体ずつ乗せては丘の上へ運んで行つた。掘り出す遺体は、三段も四段にも重ねて埋葬されており、地面に密着していた皮膚はバリバリと音を立てて剥ぎ取られ、真っ赤な肉を見せて掘り出される。その凍つた遺体も暖かい日

差しにさらされると、変形した顔も元に戻り、見覚えのある顔となる。この人も死んでいたのかと囁く声も多く、私も数人のそういった遺体に祈りを捧げた。

どこにあつたかと思う程新しい多くの輜重車が集められ、遺体三体を積んだ車の列が続いた。私達の車が大通りに出たところ、二人の子供の手を引く婦人が珍しいものでも見たいと思つたのか、足早に近付いて来た。しかし、車の上が死体と判ると大声を上げて、二人の子供を抱えて逃げていった。私はどうしてあんなにも恐れるのかと思いつつ、正面に顔を戻して見ると、目前には垂れた遺体の顔があり、私もギョツとして苦笑した。ゆるい坂を登つて行くと壕に着いた。

ソ連兵の作つたという五百人埋葬用の大きな壕の中へ、車ごと引き込み、奥から積み重ねて行く。続いてもう一段積み上げるため、遺体の上を踏んで行けと言う。その時のことを思い出す度に、今でも足の裏に柔らかな腹や顔等の感触が

蘇ってくる。最後は遺体を上から投げ入れて、五百人を一つの壕に埋葬した。

遺体は運ぶのにも好き嫌いがあつた。あまり違ひはないと思うのだが、重い遺体は勿論のこと、軽くて小さい白布で巻いた看護婦さんの遺体も、敬遠されていた。

こんな作業が四日間続いたのであるが、二日目の夜の雨で地面がぬかるみ、三日目は一步一步泥から足を抜きながら歩いた。そのため、足の付け根が痛み、足が抜けるような感覚がして歩けなくなつてしまつた。そこで、夕方には死体に乗せていた輜重車に乗せて貰つて帰つて来た。そして、とうとう四日目は休んだが、その後ソ連軍によつて碑が建てられたと聞いている。

戦後各地に政府は遺骨収集団を派遣しているが、私達の居た延吉には一回もなく、話題にも上がらない。邦人と共に多くの霊の眠る延吉を思う時、残念に思えてならない。

ソ連軍去り、八路軍へ

昭和二十一年四月中旬のある朝であつた。藤原雅英氏の『果てしなき山河に』の中で、「ソ連軍は四月二十日去り、二十一日から吉東軍となる」と書かれているので、二十一日の朝かもしれない。その朝は特に霧もが深く立ち込め、鉄条網の外を動哨しやうしているいつものソ連兵とは違ふ異様な兵の姿があつた。

ソ連兵に異変があつたに違ひない。服装も一人一人違ふので、これは八路軍だと皆と話す。前記藤原氏の本によれば、八路軍の進出が遅れたため、附近の若者を集めて作つた吉東軍だと言ふ。正規の八路軍の集まるまでの処置だつたようだ。

ソ連軍は、多くの日本兵を連れ去ると共に、満州と北鮮の大量の物質と機械を持ち去つた。中継基地としての延吉の価値も無くなつたのだろう。第六四六收容所の中も随分淋しくなり、間もなく私達は丘の上にある第二八收容所へ移動して第二八收容所の兵と合流したのであるが、その間大き

な動きもなく毎日を過ごしていた。下関の藤田孝さんの『あの日から』の本の中では、昭和二十一年五月二十八日、邦人一千数百人が天主教会より第六四六収容所へ移ったことが書かれていたが、私達はその以前に第二八収容所へ移ったと思われる。

## 第二八収容所

第六四六収容所から移動することになって、元気の無い行列が、第二八の収容所へ向かってトボトボと続く。陸軍病院の前では、数人の顔色の悪い患者が門の前で私達の通る姿を眺めていた。「この病院でも多数の兵が死んだことだろう」と話しながら通り過ぎた。

第二八収容所はゆるい丘の上を利用した急造バラックで、広い土地に木造兵舎が並んでいた。これも鉄条網で囲まれているが、広い敷地の中は草が茂り、野草の収集に大変便利であった。決められた木造兵舎に入ったところ、シベリアへ出発した先任者達が、兵舎の板壁を剥いで暖を取ったの

か、食事を作ったのか、外の明かりが差し込む程の穴が各所にできていた。早速、修理することから仕事が始まった。

この延吉の町は、山や高地に囲まれた盆地にある町だと言うことが、第二八収容所に来て初めて分かった。太陽が西の山に沈む頃、一面に夕日に染まった延吉の町はすばらしく、間もなく、空に星が見えてくる頃になると、延吉の町にも一つ二つと明かりが見えて来る。毎日のように斜め右下の町を眺めては、一つ一つの明かりの下で一家団欒の光景を想像し、その明かりの増すごとに望郷の思いは募って苦しくなった。

そんな辛い思いを抱きつつも、またしても夕暮れになると、よく見える丘に一人二人と集まって来る。そんな我々を暗くなるに従って急激に下がる外気の寒さが、現実を引き戻す毎日であった。

私は第二八収容所では、木造兵舎の上段を自分の場所と決め、右隣には沖縄出身の年配の兵、下には徳島県板野郡生まれの若い十七、八歳の海軍

の兵がいた。

ソ連兵が去り、八路軍になってからは階級章が無くなって、両氏の階級は判らなかつたが、多分、兵長ではないかと思つていた。年配の沖繩生まれの人を初めはどんな人なんだろうと心配していたが、付き合うに従つて好人物だと分かつて来た。しかし、勝負事が好きで、毎晩徹夜で花札賭博をしては、朝になると使役に行つた。

初めの頃は運が付いていたのか、朝になると帰つて来ると、賭博で勝つた大金を私に預けては使役に出て行つた。その姿を見ると、異様に腹がふくれている。それは患者から依頼された品を腹に巻き、外で売るためであつた。その姿を見送りながら、私は患者が生きようと自分の衣類を脱いでいる哀れな姿を想像していた。暗くなつた頃、賑やかな声と共に使役の人達が帰ってくる。沖繩の人は、その日の外出であつた話と共に、買つてきた品を出して私と一緒に夕食を食べては賭博に出掛けて行つた。

当時、野草を食べ過ぎて、下痢で衰弱が激しい私には、大変嬉しい有難いことであつた。長い間勝ち続けてた賭博も、昭和二十一年八月に入つた頃より、毎晩のように寝ている私を起こしては、預かっている金を少しづつ持ち出すようになって。そして、いつ持ち出したのか、私の靴もなくなつていた。

日本に向けて出発する当日、どこから持つて来たのか、海軍の短靴を「大変お世話になりました」と礼と共に渡された。私も出発は各県別になるため、もう会うこともないと思い、長い間のお礼を言つてお別れした。

徳島の若い兵隊は、私を兄のように思つたのか、いつも側を離れず世話をしてくれた。下痢の続く或る日、目の前が暗くなり、倒れたことがあつたが、急いで病院へ走つて、軍医に連絡してくれたのも、この若い兵であつた。どれ程の時間意識不明だったのか、気が付いた時は軍医が針治療をしていた。

八路軍になり一層食料事情が悪化し、重症患者でもコウリヤンのお粥だと聞いていたが、私達も少しでも満腹感を得たいため、収容所内の野草を食べては下痢をしたのが原因であつたと思う。アスピリンの風邪薬や健胃錠もソ連軍に引き上げられて無く、下痢止めには「げんのしょうこ」が良いやうので、探して陰干しをして飲むが一向に止まらなかつた。そこで炊事場附近に捨てられた骨を焼いて骨粉を作つて飲んだり、急ぐ時には焚火の炭を嚙つていた。

そんな毎日の中で、徳島の若い兵が下痢をしてると聞いていたが、私の留守の間に赤痢だと言つて入院していた。間もなく死亡したと伝わつてきて、早速見舞いに行けば良かったと悔やまれた。この若い兵の所へは以前兵曹長ではないかと思える人が直心棒を持つてよく尋ねて来ていた。この人達の中ではまだ戦争が終つていないのかと、いつも入つて来る度に思つていたが、この人に続いて赤痢で死亡しただけに感染したのではな

いかと思う。

まだ若いだけに、可哀想であり、残念であつたので、郷里の親に是非知らせてあげたいと思つていた。しかし、復員後あまりに多くの人達が、親、子、夫を尋ねて来られ、苦しかつた戦後の説明に苦しんだ。そうして連絡後の遺族を思い、思案をしている内、大事に足に巻いて隠し持ち帰つたメモをなくしてしまつた。

〔編注〕

田上建氏の手記(二)は、第XIII巻に掲載されています。

## 戦争を知らない兵隊

佐賀県 佐藤 義孝

私は佐賀市久保泉町川久保在住です。昭和十三(一九三八)年一月十日、久留米第四十八連隊第